全く根拠がないわけではないが、また確かな根拠に由来するものでもない。そのことは、後世において決して定説が生まれなかったことが何よりの証拠であろう。

さて、そもそも十乗に具略の分別が存するのは、行者の機根の相違に拠るものに外ならない。しかしそのような行者の機根そのものについて、智顗の円熟した実相原理に立っていう場合、これまで評価されてきた三根の分別だけでは片付けられない問題があるのではないか。いわゆる十乗観法の修行規定を行者の機根といった点に注目した場合、それが具体的にどのような意味を有するものなのか。すなわち円熟した実相原理にたって修する行者の機根といった課題が、十乗観法の修行規定を考察する上での最も重要なポイントになると思われる。そこで今回特に注目したいのは十乗の中の第三巧安止観である。いわゆる巧安止観では、信行と法行とに基づいた機根根性について言及し、それを基軸に安心法を示すと同時に、また十乗観法を修する上での、行者の機根の基本的形態をも説いているからである。今回の発表では、巧安止観の十乗観法全体における意義付けとともに、そこで説かれる機根根性を中心に考察し、十乗観法の修行規定について検討してみた次第である。

善導の観経教判論

調　晋一

善導は、自身の仏弟子としての歴史的使命を「某今欲下出二此ノ観経要義一楷定古今上」（散善義）と被瀝している。楷定古今とは、「今乗二二尊教一広開二浄土門一」（玄義分）という教学的営為である。善導はその根拠を「我依二菩薩蔵頓教一乗海一」（同上）と表白する。それは、「我等愚癡身曠劫来流転今逢下釈迦仏末法之遺跡弥陀本誓願極楽之要門上」（同上）という遇教における決断である。善導の教判の視座は、仏法が末法五濁を生死する自身に本願の救済として現成した事実、すなわち回心を基点とする仏教の歴史観にある。回心という宗教的主体の目醒めにおいて、自身に至るまでの仏道の歴史的展開が、弥陀の大悲弘願を根幹とする本願流伝の歴史であったと覚証された本願史観である。またその課題は、『観経』二尊教を開顕する一事において、仏教の現在性を仏弟子として批判的に問い、民衆に仏道を公開していくことにある。それは同時に、教理的整合性をもとに大乗、そして一乗・三乗の権実を誇示主張する聖道の仏教を歴史の大地より基底的に問い返していくことでもあった。今回は、「我依菩薩蔵・頓教・一乗海」という集約的表現に託された善導の仏道領解を尋ねていくことにする。

善導の観経理解の基軸は、発遣の教主釈尊と招喚の救主弥陀による二尊教と見定めた点にある。すなわち、釈迦の要門（定善＝息慮凝心…韋提致請　散善＝廃悪修善…仏自開　⇩観仏三昧）を

正説とする『観教』に、「大経に説くが如き」弥陀の弘願（「一切善悪凡夫得レ生者、莫レ不レ皆乗二阿弥陀仏大願業力一為増上縁也」⇩念仏三昧）を聞き取っていった。だから「今此観経即以二観仏三昧一為レ宗、亦以二念仏三昧一為レ宗」と、一経に観仏・念仏両三昧の二宗を立てている。『観経』は、二宗を立てることによりはじめて一経の一宗が明らかとなる。その一宗こそ釈迦・弥陀遣喚一致の弥名念仏である。このことは、あくまでも「一心回願往生浄土一為レ体」（同上）という一体、すなわち願生浄土の歩みにおいて領受される事柄であった。善導は、この二尊教の宗体の確認のもとに「今此観経菩薩蔵収、頓教摂」（同上）と決定する。

また『般舟讃』では、讃偈の形態を取りながら次のような教判を展開している。まず、釈尊の一代教を「人・天・二乗法・菩薩涅槃因」五乗と「漸・頓」の二教で尽くし、「根性利者皆蒙レ益純根無智難二開悟一」（般舟讃）と述べる。しかしその全体を、菩薩の進趣階梯を詳説する『菩薩瓔珞本業経』一経に総括的に統摂し、「門門不同」（同上）の漸教と断定する。なぜなら、掲げられた理念は頓教であろうとも、機の利鈍・修道の成不成を問わず、事実としては「万劫修功にして不退を証す」（同上）歴劫修行の教だからであると言い切る。これを承けて、須臾に浄土に往生し、不退に住して無生を証得する「観経・弥陀経等説即是頓教・菩提蔵」（同上）と決択してくる。この教判の精神と呼応しているのが化前序の設立である。

善導は、「如是我聞」の一句のみを証信序と決定し、以下の四成就を発起序と分科した。そしてこの化前序の一段に、「雖レ無二一実之機一等有二五乗之用一」（玄義分）と開示された八万四千の漸頓諸教を統摂する。つまり『観経』は、「然二衆生障重取レ悟之者難レ明。雖レ可二教益多門一、凡惑無レ由二遍攬一」（同上）という事実のもと、門門不同の一代仏教を背景として、それらをまさしく総結する一経であると頷いている。だから一代仏教をおさめた化前序を、発起序六縁に先立つ教化以前の序としながらも、同時に王舎城の悲劇を主軸として展開していく『観経』発起序の起点ともする。そして、序分を三序六縁でありつつ、二序七縁であると料簡した。この善導の序分観は、釈尊の一代教開設の意義と浄土教興起の必然性を『観経』の経説自体に確認したものである。それは何よりも、仏滅後の末法五濁における機教相応の事実に裏打ちされたものであった。

善導にとって大乗とは、業縁存在として有限の生命をいきる一切衆生が、まさに衆生として疾く速やかに救済される仏道である。それこそが速疾頓成（頓教）の菩提の法蔵（菩提蔵）であり、菩薩の道（菩薩蔵）であると受領した。すでに浄土教の伝統は、自利利他円満を生命とする大乗菩薩道が、任運無功用に果遂されていく道を願生浄土の仏道に見究めていった。その伝統を承けつつ、善導は改めて王舎城の悲劇を序分とする『観経』を聞思した。『観経』は、人間の業縁性に苦悶する実業の凡夫を教法摂下の場とする。そして、自意識に先立ち業縁を自己とする存在の事実へと回帰させ、自他の関係性を覚醒する仏道を開示する。それが「共発金剛志・横超断四流・願入弥陀界」（同上）の往生浄土の道であった。如来の真心徹到である共発の金剛心の獲得において、横さまに四流を超断し、願生する浄土を存在の故郷として自他平等の関係性を回復する。善導は、この本願の仏道こそ業縁存在としてある人間に公開された「菩薩蔵・頓教」であると証言した。

如来の大悲弘願は、一切善悪の凡夫をして「皆阿弥陀仏の大願（願）業力（行）に乗じて増上縁と為」す念仏往生人と変革する。その大悲願心の自己表現こそ、「念仏衆生摂取不捨」（観経）としてはたらく願行具足の南無阿弥陀仏にほかはらない。

善導は、この「菩薩蔵・頓教」において、はじめて究竟する事実をさらに「一乗海」と語る。それは、当時の時代民衆との生き合いの中で、そこに具現する一乗法・南無阿弥陀仏の事実に触れ、確証された信念の表明である。「順彼仏願故」（散善義）の称名正定業は、人間の一切の諸属性を簡ぶことなく、遇縁存在として千差万別の各別の業を生きる人間を、真に一人として皆同じく斉しく根源的に覚醒する群萌の一乗である。善導は、この一乗の事実を「一乗海」と語り、その具体性を「乗彼願力」という一点において「五乗斉入」（玄義分）と確かめている。五乗（菩薩・声聞・縁覚・天・人）が五乗としての意義をもつ。それが、簡明直截に「謗法闡提回心皆往」（法事讃）とまで明言されてくる「一乗海」である。

このような善導の教相判釈には、遇縁存在の凡夫という人間観がある。このことについては、「五乗斉入」、人間観としての二乗種不生論という観点から再考察されなければならないが、紙数の都合により詳述は別の機会に譲りたい。

真仏弟子
―浄土真宗における人間観―

三木彰円

浄土真宗における人間観を考える時、それは「信巻」真仏弟子釈に集約的に明らかにされている。親鸞はそこに選択本願に帰すことによって明らかになる人間の存在の本来意義を「釈迦諸仏の弟子」として「偽に対し仮に対する」歩みを必然する存在、すなわち「金剛心の行人」と位置付けるとともに、その根拠を「斯の信行に由りて大涅槃を超証す可きが故に」と確かめる。親鸞が押さえる信とは、人間に付加的に位置付けられるものを言うものではなく、既に「涅槃の真因は唯信心を以てす」（信巻）と明らかにされているように、「涅槃の真因」としての生存の本来性を人間に与えること、さらに言えば、「涅槃の真因」としての人間に成ることが与えられることに他ならない。「常没の凡愚・流転の群生」たる十方衆生に「三心の誓」を誓う如来本願も、人間にこの信を「我・一心」として成就することにおいてあるのであって、そのことは「獲得」という課題的な言葉によって人間に堤起されていると言える。

この信の成就とは、あくまでも各別性に生きる人間の、その各別性における成就を基点とすることであるが、その各別性の成就とは「十方衆生」・「一切の群生海」に誓願する如来の本願悲心に立脚することであるが故に、願心内存在としての一切性が人間の生存意義として「一人」に明らかになることに他ならない。すな